

2021年1月

## 今月の新着図書から

『折口信夫全集 25 倭をぐな（短歌作品 2）』（中央公論社，1997年）

『折口信夫全集 27 死者の書・身毒丸』（中央公論社，1997年）

高等科図書主任

林 知宏

折口信夫（1887-1953）は明治以降の近代日本において、「国文学の発生」に代表される古代研究や民俗学、神道などの研究に独自の世界を切り拓いた知的巨人である。また小説、あるいは短歌（「釈道空」名義で発表される）の創作においてもユニークな活動を行ってきた。折口に関する研究書、啓蒙書の類はあまた積み重ねられ、今日もなおとどまることなく刊行され続けている。最近の刊行の中では、斎藤英喜『折口信夫：神性を拡張する復活の喜び』（ミネルヴァ書房，2019年）、岡野弘彦『折口信夫：その思想と学問』（ちくま学芸文庫，2020年）が印象に残る。多くの人々が関心を寄せるのも当然で、言説だけでなく行動も併せて、これほど興味深い人はそうそう存在しないのではないか。

今回、一般社団法人霞会館「霞会館文庫」の助成を受けて、1990年代に刊行された新版『折口信夫全集』全37巻を一括購入することができた。何よりこの機会に「オリクチシノブ」にふれてみるのはどうだろうか。新たな発見をもたらすだろう。

先にあげた著名な論文「国文学の発生」を含んだ『古代研究』は、最初の3巻に所収されている。「まれびと・よりしろ・とこよ・みこともち・ほかひびと・たまふり」等々といった折口名彙と呼ばれる独自の用語を使用しながら、ある意味誰にも確認できない事柄に対してユニークな論述を組み立てていく。その態度は、正否についての専門的な判断を措いて、独創的発想が持つ迫力がある。ただ私などのような門外漢には、やはり難解に感じてしまう点も多い。より理解しやすかったのは、表題に挙げた小説や短歌の方である。

『死者の書』は、「した した した」といった不思議なオノマトペの多用とともに、死者との魂の交流が描かれ、実に神秘的な雰囲気醸成作品である。短く内容を要約することなどとてもできない。他の追従を許さない物語世界が構築されている。一方で短歌の方は、折口の実人生の中での様々な体験、特に戦争体験を題材にしたものが心に残る。養嗣子の入籍をした春洋を硫黄島の戦いで失い、終戦を迎えて折口は「野も山も秋さび果てゝ草高し。人の出で入る声も聞こえず」、「しづかなる山野に入りて思ふべくあまりにくるし。国はやぶれぬ」という短歌を残した。杜甫「春望」の一節、「國破山河在 城春草木深」と共通する喪失感、無念さ、悲しみ、怒り、様々な感情の凝縮を感じるだろう。折口作品は、角川ソフィア文庫（特に注釈が充実）、その他の文庫でも読むことができる。携帯を考えるとそちらの方が便利だが、ぜひこの機会に全集に取り組んでみようと思う。